大阪大学 高等教育・入試研究開発センター
高校教員のための探究学習指導セミナー〈入門編〉リポート

問いの立て方から評価まで、探究学習の流れを学ぶ

次期学習指導要領では、「総合的な探究の時間」だけでなく、各教科においても探究的な学習活動が求められている。探究学習のあり方を模索する現場の教師を支援するため、問いの立て方から授業デザイン、評価まで、探究学習の一連の流れを学ぶ指導者向けのセミナーが大阪大学にて2日間にわたって開催された。その概要を、参加者、講師の声とともにリポートする。

新しい学力観に基づき授業改善を支援する高大連携

大阪大学における入試改革、高大連携、そして教育改革を支援・推進する高等教育・入試研究開発センターが、「高校教員のための探究学習指導セミナー」を開催した。その背景には、大阪大学の全学部でAO入試、推薦入試のどちらかで、従来の基準にとらわれない多面的・総合的な評価による選抜を実施するようになった一連の入試改革があると、同セミナーの講師で、探究学習をテーマにした本誌前号（8月号）の特集・座談会の出席者の一人である全学教育推進機構の佐藤浩章准教授は説明する。

「小手先で入試を変えるだけでは、真の高大接続にはなりません。新しい学力観に基づいて、入学前から高校の先生と協力して生徒の資質・能力を育て、さらには高校の授業も変わっていくように支援をしたいと考えました。大阪大学は世界水準の研究を推進する研究大学に選出されていますが、研究大学には次代を担う研究者、探究者を養成する使命もあります。今回のセミナーは、高校と連携した研究者・探究者育成の方法を模索する取り組みでもあります」

グループワークも取り入れ、教師自身が「探究学習について探究」した2日間の様子を紹介していく。

大阪大学 全学教育推進機構 准教授
佐藤浩章 さとう・ひろあき
愛媛大学大学教育・学生支援機構教育企画室准教授・副室長を経て、現職。

図1 セミナーの概要、プログラム

日　程　2018年8月7日（火）、8月8日（水）の2日間
講　師　大阪大学 佐藤浩章准教授、山下仁司教授ほか
参加者　探究学習を指導している、あるいは指導予定の高校教員約50名

1日目

講演／入試改革の動向と探究学習のあり方
講義／探究学習入門
講義／探究学習の授業デザイン
講義／探究学習の評価

2日目

グループワーク／参加者による「探究学習の授業デザイン」の発表と相互フィードバック
パネルディスカッション／学生の視点から見た探究学習
事例発表／5校の探究学習の実践事例
講義／行動計画立案、クロージングセッション

1日目

問いの立て方から評価まで 探究学習の一連の流れを理解する

教師のかかわり方や、「よい問い」について考える

セミナーは、高等教育・入試研究開発センターの山下教授による、「入試改革の動向と探究学習のあり方」に関する講演でスタートした。探究学習が高大接続の観点からも求められていることを理解した後、佐藤准教授が、探究学習を構成するステップ（図2）や教師のかかわり方、ルーブリックやポートフォリオを用いた評価の方法についての講義を行った。

講義の途中には、参加者間でのディスカッションも行われたが、特に、生徒が探究学習にのめり込んでいくような「よい問い」とはどのようなものか、参加者は熱心に意見交換を行った。生徒の「問いの立て方」について課題を感じている教師が多いことが伝わってきた場面でもあった。

最後に「高校生向けの探究学習をデザインする」という宿題が提示され、この日の研修が終了した。

図2　探究学習のデザイン

7つのステップと2つのアプローチ

＊セミナー配布資料を基に編集部で作成

図3　浅い問いを深くするには？

◎「既存の資料を調べれば分かる問い」を少しアレンジすることで、自分で思考し、知識を創造する必要のある問いになる。

「昆虫とは何か？」
→昆虫が絶滅したら、地球上には何が起こるか？

「地球上で最大の動物は何か？」
→クジラよりも巨大な動物がいないのはなぜか？

「人間はどのように自己を認識するのか？」
→木は思考するのか？
→ロボットはいつになったら自己意識を持つのか？

＊セミナー配布資料を基に編集部で作成

2日目

自ら探究学習をデザインし、他校の教師と語り合う

学生たちが振り返った「フィードバック」の大切さ

4人程度のグループになって、それぞれが考えた「探究学習」を発表し、相互に感想や改善のアドバイスを述べた。参加者の学校の状況や担当する教科などは異なるが、むしろその差異があることによって、「学校や教科の違いを超えて、探究学習において軸となるもの」を参加者に模索させることになった。

さらに、高校時代に探究学習に取り組んだ経験を持つ学部生・大学院生3人が高校時代の活動を振り返った。3人が共通して語ったのは、「教師からのフィードバックの必要性」であり、「生徒が成果発表をして終わりではなく、先生から探究学習のよかったこと、悪かったことを評価として戻してもらえると次の探究学習につながる」などの声が上がった。

最後に、5つの高校が分科会形式で実践例を発表し、研修は終了した。

図4　分科会で発表された実践例

◎学校設定科目による課題研究の取り組み（公立）

◎課題研究を進めるための手作り教材（公立）

◎通常授業で探究スキルを伸ばす試み（私立）

◎大学・企業等との協力や校外研修との連動による課題研究の実践と、各教科における探究学習推進の試み（公立）

◎生徒の多様性と蔵書の多様性が出会う、学校図書館を活用した探究的学び（私立）

写真1　2日間の研修では、参加者同士の議論の機会が頻繁に設けられた。探究学習についてこれから校内で実践したいと考える教師たちの、学校を超えた仲間づくりの意味もあった。

大阪大学 高等教育・入試研究開発センター 高校教員のための探究学習指導セミナー〈入門編〉

参加した高校教師の声

生徒へのかかわり方を大きく転換させる

岐阜県立大垣西高校 **水谷哲也**先生

主体性やプロセスを重視したプログラムに改善したい

本校では、進路指導部が中心となり、これからの入試を見据え、後期より「総合的な学習の時間」で探究学習をスタートさせます。私たち教師には、生徒が正解を選べるように仕向けるのが自分の役割だという考えが強くありますが、探究学習ではそういった考えをいったん忘れることが大切なのだと、今回のセミナーで実感しました。また、生徒自身が主体的に動くことが一番重要であり、失敗してもよいのだということを学校の先生方に伝えていきたいです。

学習プログラムも少し変えようと思います。例えば、当初は、1年間の探究学習を終えた2年生が、これから活動に取り組む1年生の前でポスターセッションをすることを活動のゴールにしていました。しかし、それでは成果物の評価だけに終わってしまいかねないので、事前に探究学習で育成を目指す資質・能力をルーブリックで生徒に示した上で、それらがどのくらい身についたのかを生徒が自己評価する時間を最後に設けたいと思っています。

また、探究学習のテーマと問いも、最初は教師が挙げたものの中から生徒に選ばせるつもりでしたが、まずはグループで話し合って、自分たちでテーマや問いを考えさせ、見つからなかった時は、用意したものの中から選択させるようにしたいと思います。生徒がより興味を持って取り組める問いに出合い、探究にのめり込んでいけるように、プログラムを継続的に改善していきたいです。

生徒が自ら問いを立てるような授業設計が求められる

福岡県立筑紫高校 **飯田啓介**先生

ファシリテーターの経験者を校内に少しずつ増やしていく

本校では、「総合的な学習の時間」において、社会問題の解決に向けて高校生としてどんなアプローチができるのかを探究していく活動を昨年度より行っています。ただ、私たち教師には、生徒に知識を授けるスキルはあっても、生徒の思考や対話を促進し、自ら必要な知識を獲得する方向に導くようなファシリテーターとしての経験はまだまだ不足しています。

今回のセミナーを通して、生徒を探究者へと育てるためには、いろいろなことに疑問を持ち、問いを立てさせることが大切なのだと確信しました。目の前の物事に関心と疑問を持てるようになるためには、日々の授業で生徒が自分の思ったことを発言できる場をつくることが大切ですし、そうした機会を意図的に組み込んだ授業設計が必要だと思いました。

また、セミナーでは、学生の方々に探究学習の経験を聞く機会がありましたが、教師からのフィードバックを切望していたというお話が印象に残りました。生徒へのフィードバックも探究学習の最終段階だけではなく、伴走者のように途中のプロセスで頻繁に与えるべきだと思いました。

他校の実践事例を伺う中で、探究学習の経験者を増やし、次につなげていくためには、ある程度の時間も必要だということも理解しました。今年度の探究学習の経験を、次の学年に伝えてプログラムを改善する中で、学校全体に探究学習の指導経験者を増やしていきたいと思います。

大阪大学 高等教育・入試研究開発センター 高校教員のための探究学習指導セミナー〈入門編〉

佐藤浩章准教授の振り返り

校外の学びをヒントに、校内で「探究学習」を話し合う

探究学習の指導ノウハウ以上に教師の役割の再定義が重要

探究学習に関するセミナーは今年で4回目ですが、年々、参加者のモチベーションが高くなっていることを感じます。今回の参加者のうち、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）やスーパーグローバルハイスクール（SGH）の指定校以外の高校からの参加者が半数以上でしたし、探究学習の指導経験が2年以下という先生がやはり半数以上でした。学校やキャリアを超えて、探究学習に対する関心が高まっているのでしょう。

セミナーに対する現場の先生方のニーズは、やはり探究学習の方法論や指導法にあります。探究学習に取り組ませてはいるけれど、生徒がのめり込んでいくような問いを立てられないなど、指導している先生ほどモヤモヤを抱えています。実際、今回のセミナーでも、問いを立てるペアワークなどで苦労している先生は少なからずいたようです。また、リーダー役となる教師は探究学習を推進したいものの、周りの教師の理解が追い着いていないなど、教師間の指導のぶれが大きく、学校全体として実践することに困難を抱えている事例もよくあります。実際、探究学習は、アクティブ・ラーニング等に比べると、現場の先生方に役立つ参考書籍は多くはありませんから、実践のヒントを1つでも多く持ち帰りたいという強い思いで今回のセミナーに参加した先生が多かったはずです。

私自身は、探究学習を校内に根づかせていく段階では、指導方法に関するノウハウの普及以上に、教師の役割の捉え直しが大切だと思っています。私は、探究学習での教師の役割は、生徒にとっての「探究者のモデルであり、伴走者である」ことだと考えます。つまり、これまでの授業における知識提供者としての役割をどこまで捨て去ることができるかがカギになります。

探究学習のモデルは部活動や学校行事にある

今回のセミナーでは、探究学習の設計について重点的に扱っているため、生徒の探究のプロセスに教師がどうかかわっていくとよいのかについてはほとんど取り上げていません。それについて私は、部活動や学校行事がモデルになると考えています。部活動や学校行事では、先輩と後輩の関係を利用して、教師ができるだけ生徒に活動を委ねることがよくあります。部活動や体育祭、文化祭と同様に、教科や「総合的な学習の時間における探究学習」でも、教師に代わって上級生に伴走者になってもらうことで、探究学習における徒弟制モデルが校内に確立できると思います。そうなれば、キーパーソンとなった教師が異動しても、探究学習はその学校の文化として根づいていくはずです。

探究学習に関するセミナーは今後も開催していく予定ですが、どんなに優れたセミナーであっても、参加するだけでなく、そこで学んだことを現場に戻って応用していただかないと意味がありません。私は、参加された先生方を始め、探究学習を校内に根づかせようとしている先生方には、自校で探究学習の勉強会を立ち上げ、「本校における探究とは」をテーマに自分たちで問いを立て、継続的に話し合っていただきたいと思います。よい問いは人を集めるものです。そして、教師も探究をし続けているという姿を生徒に見せることこそ、最大の教育方法だと思います。

※大阪大学 高等教育・入試研究開発センターウェブサイト〈https://chega.osaka-u.ac.jp/〉で今後のイベントの予定が確認できます。